

I-15

公共空間におけるアート作品に関する研究
 —再開発計画により設置されたパブリックアートを通して—
 A study on the Art Works in Public Spaces .
 -Through the Public Art in redevelopment plans.-

○馬淵かなみ¹ 佐藤慎也²
 Kanami Mabuchi, Shinya Satoh

In recent years, the exhibition space has been developed into a public space from museums. Public Art has been making different works with the museum. Because Public Art must be analyzed and evaluated from different perspectives, background and environment through to production art works. This study explore the possibilities of the nature of the Public Art, through the relationship between public space and the art works in urban areas, exhibition space in urban areas, the way of appreciation. Then, the study aims to clarify how a new relation between art and public space.

1. 研究目的

近年、展示空間は美術館から公共空間へと発展してきている。パブリックアートもその一つであり、「公共空間」では新しい表現形態が生み出されている。パブリックアートは、美術館とは異なる作品づくりが行われている為、作品制作にいたるまでの背景や環境など、さまざまな視点から総合的に分析し、評価されなければならない。また、都市部においては、魅力的な公開空地づくりのためにパブリックアートが注目されている。本研究では、建築やランドスケープとアート作品が同時に計画されている再開発計画に的を絞る。都市部の公共空間と作品の関係、展示空間、鑑賞のあり方を明らかにする事から、パブリックアートの特質や可能性を探る。そして、アートと公共空間との新たな関わり方を明らかにする事を研究目的とする。

2. 研究方法

再開発計画におけるアート作品を研究対象とする。対象事業はファーレ立川（1994年）以降から現在に至るまでのものとし、2人以上の作家が参加、設置作品数が5作品以上、敷地面積が10,000m²以上、かつ東京都内と横浜市の実業に限定し、永久設置を想定した作品とする。

以上の条件に当てはまる全18事業、283作品に対し、場所との関係、建築計画・ランドスケープとの関係、鑑賞者との位置関係、身体的関係の4項目に従い分類を行う。文献調査、現地での観察調査をもとに分析を行う。

3. 考察

3-1 場所との関係

作品の設置された場所との関係による分類。ここでの場所とは、固有の「場」を持つ場所性、土地の歴史や地域住民の活動などを背景にした地域性の事を言う。

表1 作品と場所の関係性による分類

分類型名	解説
i 環境型	場の空間的要素や、物理的要素（光、風など）を作品に取り込んでいるもの。
ii 文化型	土地の歴史や地理、文化と結びついた作品。
iii 素材型	土地の材料、名産などを使用して制作された作品。
iv 住民型	地域住民、施設利用者などが制作に関わっている作品。
v 思想型	作家自身が設置場所を基にして、イメージネーションした事から制作された作品。
vi 作品先行型	既成の作品を、その場に適合するものとして設置者が解釈し、設置された作品。

図1から作品の多くは、場所と関係を持ち、場所の要素を取り込んでいる事が分かる。失われた土地の文化やコミュニティの軌跡を残し、再編成するなどアート作品によって土地の地域性が受け継がれている。

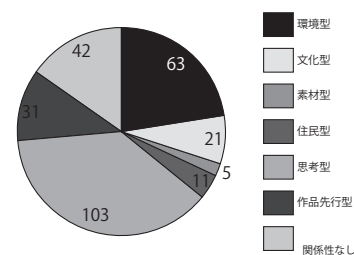


図1 作品と場所の関係割合

3-2 建築・ランドスケープとの関係

建築やランドスケープがつくり出す空間との関係による分類。設置空間に対し作品がどのような役割を果たし、どのような相互関係を持ち計画されているかを明らかにする。

表2 作品と建築・ランドスケープとの関係による分類

分類型名	解説
i ランドスケープ型	建築・ランドスケープと関係を持って作品を設置している作品。
ii 機能型	都市機能を付帯している作品。
iii 一体型	作品自身が建築を構成する要素の一部となっている。
iv 装飾型	作品自身が建築を構成するある部分の、装飾的な役割を果たしている作品。
v 空間型	空間と一体となっている作品。
vi 付帯型	作品が建築を構成するある部分、要素に付帯して設置されている作品。

図2より、8割以上の作品が展示空間と関係性がある事が分かる。付帯型を除く約6割の作品はその場所でしか成立し得ない。これらの作品は、その空間において固有性を有していると言える。

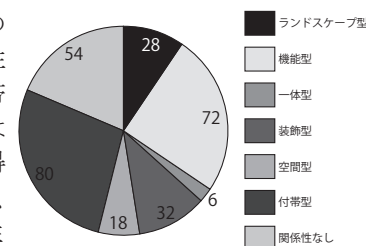


図2 建築・ランドスケープとの関係割合

3-3 鑑賞者との位置関係

作品鑑賞時の観賞者と作品の位置関係による分類。

全方位型は、広場や吹抜け空間に多く設置され、計画におけるシンボルとして機能している作品が多かった。作品によって空間の求心性が生まれている事が分かる。正面型Aは、歩道の車道寄りに設置された作品が多い。作品は、利用者の意識を道の中央に向けさせ、ストリートと一体となった景観を創造していると言える。横移動型は、ベデス

¹ 日大理工・院・建築

² 日大理工・教員・建築

¹ Graduate Student, Graduate School of Sci. & Tec., Nihon Univ.

² Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Coll. of Sci. & Tec., Nihon Univ., Dr. Eng.

トリアンデッキなどの都市における移動空間に設置されている。日常生活における移動という体験が、アート作品の介入によって違った体験になると言える。

真下型は、歩道上に延長され設置されているものが多く、人々の動線を誘導するように設置されている作品が多数あった。また、立体的な広場の床面にも多く設置され、ミクロとマクロの観賞方法を生み出していた。見上げ型は屋外に多く、見下げ型は、立体的に動線が交差する空間に多く見受けられた。集中型の作品のほとんどは立体作品で、吹抜け空間に多い。全方位型と集中型の組み合わせが多かった。縦移動型は階段などに多く、空間を上下に移動する事でさまざまな角度から作品を連続して体感する事ができる。

このように、鑑賞者との位置関係の違いによって、設置空間に空間的な特徴がある事、空間によって作品の形態も異なる事が分かった。

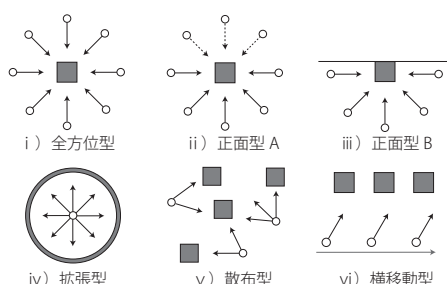


図3 作品と鑑賞者の断面的位置関係による分類

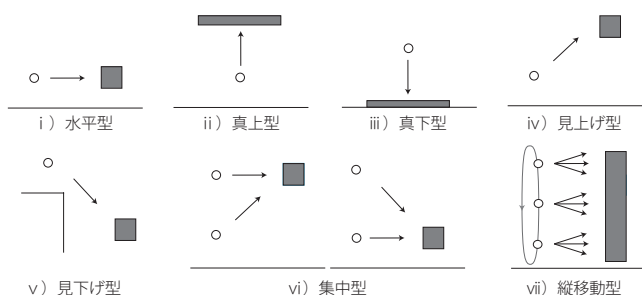


図4 作品と鑑賞者の断面的位置関係による分類

3-4 鑑賞者との身体的関係

鑑賞者が作品鑑賞時にどのように鑑賞するかによる分類。観賞方法の制限を受けず、鑑賞者が自由に観賞できる点がパブリックアートの特徴的な要素である。

表3 鑑賞者との身体的関係による分類

分類型名	解説
i 視覚型 A	遠景で作品を観賞する作品。
ii 視覚型 B	作品と鑑賞者との間に障壁（ついで、植栽など）がある、もしくは物理的距離があるため、視覚的な観賞のみを行う作品。
iii 接触型	実際に触れる事のできる作品。
iv 行為型	鑑賞者に行為を誘発する作品。
v 体験型	作品に対して鑑賞者が参加、体験する作品。

図5より、身体的関係性の強い3つの型（接触、行為、体験型）の割合は6割を超えている。鑑賞者が作品に対し積極的に行動する事で作品と鑑賞者との関係性やその固有性は強くなると言える。

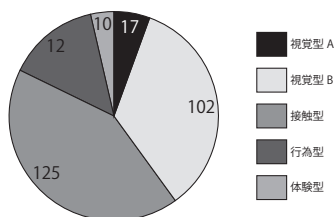


図5 鑑賞者との身体的関係割合

4 結果

4-1 サイトスペシフィック性

パブリックアートは、設置場所の「場所性」と「空間性」の双方との関係から、サイトスペシフィックな作品として存在している。「場所性」とは、その土地の持つ地域性や地域住民との関わりなど、その土地の持つコンテキストの事である。「空間性」とは、建築やランドスケープなどによって構成される物理的な空間の事である。

パブリックアートは、場所に対するアプローチの方法が様々であり、場所への依存の度合いは作品それぞれによって差がある。特に、文化型、素材型、住民型は、その土地を利用する人々にとって身近な「地域密着型」の作品である。均質化が進む都市では、「地域密着型」作品によって地域性を獲得する事ができると言える。一方で、地域により密着する事で公共的な作品が、あるコミュニティでの独占物となり「共有」される。また、機能型などは土地に必要な都市機能を補完しており、場所の固有性を得ている。一体型、装飾型、空間型は建築空間に依存しており、これらは、その固有の場でのみ成立している空間的にサイトスペシフィックな作品である。

4-2 鑑賞方法と空間的依存性

設置空間について分析を行う事で、空間が作品の形態や鑑賞方法に影響を与えている事が分かった。パブリックアートは、建築空間の多様性に於いて、作品の鑑賞方法は多岐にわたる。都市空間にはさまざまな視線の変化を生み出す立体的な空間が多く存在し、空間の特性、都市の潜在性を活かす事で、作品はより豊かな表現を可能にすると言える。

5 おわりに

パブリックアートは場所の要素を作品に取り入れる事で公共空間に設置される本質的な意味を見いだすことができると言える。土地の持つ要素を作品に取り入れる事でアート作品ははじめて公共空間に介入する事ができると言える。美術館ではない公共空間では、アート作品は「展示」されるのではなく「共有」されるものになるべきである。地域に共有されたアート作品は新しいコミュニティを生み出し、そして共有されたアート作品が設置された場合は、新しい「公共空間」へと変化していくと言える。パブリックアートは、地域に根付いた作品として、地域と共に変化していく事が必要とされる。本研究は再開発計画を対象としたが、今後これらの事業数は減少していくと言える。既存の街や建築、コミュニティを活かし、公共空間を創造していく事が今後の課題であり、アート作品が介入し、共有されていく事で新たな公共空間の創造が可能になるのではないか。

【参考文献】

- [1] パブリックアートの世界：別冊太陽、平凡社、1995. 12
- [2] 岡崎乾二郎：都市とアートの真相、美術手帖 vol. 48、p. 60-65、1996. 11
- [3] 竹田直樹：アートを開く パブリックアートの新展開、公人の友社、2001. 8
- [4] カトリーヌ・グルー：都市空間の芸術パブリックアートの現在、鹿島出版、1997. 10